

ど高率に検出される傾向があり、滲出性中耳炎の好発年齢などを考えればその病因と深くかかわっていることが推測される。

最後に検出菌の抗生物質に対する感受性であるが、インフルエンザ菌が CEX, 黄色ブドウ球菌が ABPC で感受性が低い他は全般的に感受性は良好であった。

5) Habekacin 点眼による眼内移行

大桃 明子・大石 正夫 (新潟大学眼科)

(目的) 新しいアミノ配糖体抗生剤, Habekacin (HBK) の眼内移行の動態につき検討した。この度は点眼による眼組織内移行につき報告した。

(方法) 注射用 HBK 50mg を生食水にて溶解し、0.3% 水溶液 (pH 6.0) を作製した。体重 2kg 前後の健康白色成熟家兎眼に 5 分毎、5 回点眼して経時的に眼球を摘出し、眼組織内の HBK 濃度を測定した。点眼は正常角膜眼 (非炎症眼) と NaOH 腐蝕眼 (炎症眼) について行った。HBK 濃度は、*B. Subtilis* ATCC 6633 を検定菌とする薄層平板カップ法により測定した。

(結果) 非炎症眼では良好な眼内移行は得られなかった。炎症眼においては外眼部組織、眼球内部組織ともに移行濃度を認め、また角膜においては、*S. aureus* 及び *P. aeruginosa* の 80% 発育阻止濃度を上まわる移行濃度 (0.41~7.57 μ g/g) が示された。

(結論) 0.3% HBK の点眼は細菌性眼感染症とくに角膜潰瘍などの角膜感染症に対する臨床応用が期待されるものと考えられた。

6) *P. aeruginosa* アミノ配糖体薬剤感受性

米山 恵子・坂上富士男 (新潟大学眼科)
大石 正夫

眼科領域において最近の抗生剤点眼薬の開発は、アミノ配糖体が主体であることから私共は今回、*P. aeruginosa* に対するアミノ配糖体薬剤感受性を検査した。

方法: 1981~1984年に麦粒腫、涙囊炎、角膜潰瘍、全眼球炎などの患者から分離された *P. aeruginosa* 20 株について、KM, GM, DKB, TOB, SISO, MCR, AMK, HBK の 8 種のアミノ配糖体薬剤の感受性を日本化学療法学会標準法に準じて原液接種にて MIC を測定し、又、血清型別についても調べた。

結果: 感受性分布では、KM は 50~>100 μ g/ml, AMK と GM は 1.56~ \geq 100 μ g/ml, HBK は 0.78~50 μ g/ml, MCR と DKB は 0.78~>100 μ g/ml, TOB

と SISO は 0.39~ \geq 100 μ g/ml を示した。また 12.5 μ g/ml 以上の耐性株出現率は、KM は 100%, AMK, HBK は 45%, DKB は 35%, GM と MCR は 30%, TOB と SISO は 5% であった。*P. aeruginosa* の血清型別検査では、E 型が 8 例で最も多く、B 型, A 型, G 型, H 型の順であった。

7) 最近の臨床分離菌とその薬剤感受性

小林 良彦・金子 智子 (新潟県立ガンセンター)
内山 和美・小林千津子
中村 信敏・小林 進

当院において病的材料より分離された菌種は日和見感染原因菌が主流であるが、*Staphy. epidermidis*, *Strep. faecalis*, *Ps. aeruginosa*, *Haemophylus sp.* は過去数年増加傾向が続いている。*Staphy. aureus*, *E. coli*, *Klebsiella* は横這いであり、*Ps. cepacia* は見られなくなった。その抗生剤感受性を S. 59. 8~10 の 3 ヶ月間に分離された全菌株につき Disc による成績を集計した。*Staphy. aureus* は TC 系以外には有効な菌株は少く、*Staphy. epidermidis* は Cephem 系, TC 系が有効、*Strep. faecalis*, *Micrococcus sp.* は PC 系が有効、*E. coli*, *Klebsiella*, *Enterobacter* は Cephem 系, AG 系, TC 系が、*Pseudomonas* には CFS, FOM, AG 系が有効、*S. marcescens* には Cephem 系 3 群の一部, TC 系が有効、*Haemophylus sp.* には PC 系, Cephem 系が有効であった。

8) 臨床分離細菌の β ラクタム剤感受性と β ラクタマーゼ産生能について

柄沢 安雄・樋口 興三 (水原郷病院検査科)
山作房之輔 (同 内科)

近年 β -Lactam 剤が広く使用されるに伴い、耐性菌の出現が問題となって来た。当院では 59 年 5 月に臨床材料から分離された菌種について disk 法で (H) 以上を感受性として感性率を求め、 β -Lactamase 産生は Nitrocefin 法, pH 法で実施した。*S. aureus* の β -Lactamase 産生能は Nitrocefin 法, pH 法とも高率に検出され、PC-G, PIPC に低感受性を示し、PC ase 抵抗性の MCIPC には高い感受性を示した。*E. coli* の β -Lactamase 産生能は Nitrocefin 法 94%, pH 法 20% であった。本菌は R 因子による PCase を有する為 ABPC の感受性は 67% と低く、CS ase は産生量が少ない為 CEZ 79% で第 III CEPs 剤は 95% 以上の感受性であった。*Klebsiella*・SP の β -Lactamase 産生能は

Nitrocefin 法73%, pH 法23%であったが、本菌は典型的な PC ase 産生型の菌である為 ABPC に80%耐性を示し、CEPs 剤は影響を受けないので高感受性を示した。Enterobacter SP は ABPC, CEZ に耐性を示し、 β -Lactamase 産生能は Nitrocefin 法100%, pH 法22%であり、 β -Lactamase に安定と言われる CMZ の感受性が低く、ABPC, PIPC の感受性に差がある事から本菌の薬剤感受性と β -Lactamase 産生の関係は薄く、他の耐性機構によると思われる。Serratia・SP は LMOX 以外の薬剤に低感受性を示し、 β -Lactamase 産生能は Nitrocefin 法67%, pH 法50%であり本菌の薬剤感受性の差は他の耐性機構が働いていると思われる。Proteus は Indole (+), (-) 菌とも ABPC, CEZ に低感受性を示し、他の薬剤には高感受性であった。Indole (-) 菌の β -Lactamase 産生能は Nitrocefin 法が検出率が高く、Indole (+) 菌は誘導型である為、誘導をかけない検査では Nitrocefin 法で22%と低率であった。

9) Cefotaxime (CTX), Cefmenoxime (CMX), Latamoxef (LMOX) の静脈内投与による髄液内濃度について

岸田 典治・小林 啓志 (信楽園病院)
皆川 信 (脳神経外科)
関根 理・渡辺 京子 (同 内科)

脳血液関門がほぼ正常に機能していると考えられる術後患者に CTX, CMX, LMOX を各々単独に点滴静注にて投与し、各々の薬剤の髄液内の濃度を経時的に測定した。症例は脳動脈瘤手術—23例、脳梗塞頭蓋内外血管吻合術—5例、小脳出血脳室ドレナージ—2例、小脳膿瘍脳室ドレナージ—1例である。CTX と CMX は1回 1.0g を8時間毎にそれぞれ、15例と9例に、LMOX は1回 2.0g を12時間毎に7例に投与した。各薬剤の髄液内濃度の平均最高値とその投与終了後からの時間は、CTX: $4.7 \pm 3.4 \mu\text{g/ml}$, 60分; CMX: $1.0 \pm 0.9 \mu\text{g/ml}$,

30分; LMOX: $12.3 \pm 9.7 \mu\text{g/ml}$, 60分であった。なお、全例に術後感染は認められなかった。これらの結果から、3種の薬物の髄液内濃度は術後感染を予防する目的を充分達し得るものと考えられるが、すでに頭蓋内感染を生じている場合には、セフェム系薬剤から世代の特徴を充分考慮して使用すべきであると考えられる。

10) 当院小児科分離 A 群溶連菌感受性について

仁田原義之 (魚沼病院小児科)
岩淵 憲男・南雲 雪子 (同 検査室)

A 群溶連菌は猩紅熱をはじめ呼吸器感染、腎炎、リウマチ熱など多彩な感染症状を呈し、小児科領域で最も重要な起炎菌といえる。本菌はブ菌に比べ抗生剤に感受性が高いが、近年 EM, TC, CP に耐性株が増加していると報告されている。S. 58, S. 59年の当院小児科分離本菌の型別と薬剤感受性を検討した。S. 58年141株中 T-4, 65株, A-11, 43株が年間通して分離された。T-12は5株のみであった。その他 T-1, 6, 13, 22, 28等各数株であった。S. 59年119株中 T-12 36株, T-13 33株と型の流行が変わった。比較的狭い域でも短期間に流行株が入り潜っていることが伺えた。

薬剤感受性では、AB-PC, CEX の β -ラクタム系に耐性はないと考えられた。EM に対し S. 59年は T-12 に8株, T-13 に1株が (-) の耐性、T-12 の2株が (+) と12型の耐性が多かった。CES 系では CEX に比べ CFT が阻止円直径より感受性が高いと考えられた。

II. 特別講演

産婦人科領域の感染症の現況と化学療法

松田 静治 (順天堂大学産婦人科助教授)
江東病院副院長